Angel's wing

水無紫苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ａｎｇｅｌ'ｓ　ｗｉｎｇ

【Ｎコード】

Ｎ７９４５Ｄ

【作者名】

水無紫苑

【あらすじ】

背の小さなバスケ大好き少年の物語。多分才能はあるんだけどねぇ～・・・なにせ身長が１５４ｃｍ（自称）なのです。

第1話　新たなる朝（前書き）

投稿する話を間違えて、最新話だけ消そうとしたら全部消してしまいました。。ｌｌｌｏｒｚ
細部は違うと思いますが、内容はこれまでと同じです。
それでは、よかったら読んで行ってくださいｏ（＿　＿＊）ｏ

第1話　新たなる朝

「翼飛(つばさ)～起きなさい～！彩香(あやか)ちゃんが迎えに来てくれたわよ～！！！」
「涼風(すずか)さん彩が起こしてきますね」
「悪いわねぇ～ひっぱたいてもいいからさっさと起こして頂戴」
「はぁ～い♪」

そんな会話が階下でされているとは露知らず、部屋の主は惰眠を貪っていた。いつもなら絶対に起きている時間なのだが、今日が入学式だと思うとなかなか眠れず、結局空が白みを帯び始めてやっと眠れた。よって寝てからまだ3時間経っておらず、起きれるはずがない。そんな部屋の主が寝る部屋に彩香は慣れたように乱入し目の前で眠る男の子の身体をユサユサと揺すっている。一応部屋に入る前にノックはしたのだが即開けてるので意味が無い。まぁ部屋の主は爆睡しているわけなのだから返事があるわけでもないのだが・・・

「つぅちゃん～起きて～～～！！！」
「ぐぅ～ぐぅ～ぐぅ～・・・」
「つぅちゃん～起きてよ～・・・」
「ぐぅ～ぐぅ～ぐぅ～・・・」
「つぅちゃん～・・・うぅ・・・」
「ぐぅ～ぐぅ～ぐぅ～・・・」
「彩香ちゃん～！翼飛起きた～？」
階下から翼飛ママ、即ち涼風の声が聞こえ、彩香もとある決心をして・・・
「えいっ！」

「うごっ！？」
彩香は少し助走をつけてベッドに向けて思いっきりダイブ。そのまま翼飛に対してマウントポジションをとった。その際（偶然にも？）肘が鳩尾にクリーンヒット。この一連の動作の流れはプロ格闘家をも震撼させたと言う。

「彩香！俺を殺す気か！一瞬お花畑が見えたぞ！！！」
「涼風さん～！つぅちゃん起きましたぁ～♪♪♪」
「・・・・・」
「つぅちゃんおはよ♪」
ガバッっと跳ね起きて目と鼻の先で抗議を続ける翼飛に構うことなく彩香は翼飛が起きた事を階下で待つ涼風に大声で告げると、にっこりと屈託の無い笑顔を向ける。この彩香は翼飛の幼馴染でありお隣さんだ。正直言って可愛い。まだ高校に行った事がないからはっきりとは言えないが間違いなく5指には入るだろう。中学時代では断トツでトップだったし・・・そんな彩香の笑顔を見て、怒りをぶつけ続ける男がいるだろうか、いやいない！なんとなく反語を使ってしまったが、俺も男であり・・・言うまでもなく陥落した。。ｌｌｏｒｚ

「あぁ、おはよ。とりあえず着替えるから降りてくれないか？」
「はぁ～い♪」
「・・・・・」
（にこにこ♪）
「あの～出ていってくれないと着替えられないんだけど・・・」
「ほへ？」
「いや、俺の裸みたいの？」
「はにゃ！？　は、はぅ～」
一気に顔を真っ赤にして部屋を飛び出していった。らしいっちゃらしいけど、そこまで慌てなくても・・・

ゆっくりと着替えを済ませて1階に降りると既にトースト、ベーコンエッグとサラダという朝食が用意されており、何故か彩香も一緒に朝食を取ったあと2人して学校へ向かった。

俺たちが今日から通う高校は星雲高校という文武両道をモットーとした進学校である。設備が色々と充実しているらしく、部活動も活発みたいだ。ちなみにこれは高校のパンフからの受け売り。受験の時に一度行った事があるのだが・・・周りを見る余裕なんてなかった。ダメじゃん俺・・・こんなでよく受かったな。

家から学校までは歩いて20分程度。彩香はチャリで行きたがったが「初登校くらい歩いて行こう」といって無視した。彩香もしぶしぶといった表情でついて来るが、いじけている割には話しかけてくるし、表情が表すほど気分を損ねてはいないらしい。逆に俺の気分はあまり優れなかったりする。だって、俺よりも彩香の方が背が高いんだもん・・・

かっこ悪い・・・

第1話　新たなる朝（後書き）

多分1話分はこれくらいの長さにします。
何話まで続くか分からないけど・・・
これとは他に似たようなお話を同時進行するので、そのお話と合わせて1週間に1話以上を目標にがんばりますw
（この先に待っているグダグダ感は見逃してください・・・ぉぃw）

次回予告

第2話　夫婦？
お、初日から仲良く夫婦で御登校ですかぁ～？

第2話　夫婦？

星雲高校は比較的家から近いと言う事もありよく目にする制服だが、自分が実際に着てみると新鮮だと思うから不思議なものだ。小さな頃よく遊んだ公園の横を通り、商店街の中を突っ切り、見慣れた光景なのにまるで初めて通るかのような不思議な感覚がする。改めて今日から高校生になるのだと実感する。

そんな感慨にふけりながらこれから自分の通うことになる学び舎に到着した。先程人だかりのど真ん中に突入して自分のクラスを確認したのだが、自分は1年3組だった。ちなみに共に登校し自分の少し後ろを歩いていた彩香も3組。これで小学校から10年間同じクラスになった。さすがにくされ縁もここまで来ると怖いものがある。

「お、初日から仲良く夫婦で御登校ですかぁ～？」

「！？」

そんな事を考えなら1年3組の教室を目指していると後ろから聞き慣れた声が聞こえた。一瞬無視してやろうかとも思ったけど、ここで無視したらある事ない事大声でわめき散らされるのは目に見えてるので、抗議の意味も込めて対応してやる事にする。

「黙れ水希（みずき）！彩香とはそんなんじゃないって何度言えば分かるんだ！ほら、彩香も何かいってやれよ！」

そう言って彩香の方を見てみれば顔を真っ赤にして俯いている彩香の姿が目に入った。こんな反応するからこいつにわけの分からない事を言われるんだ・・・

「ほらほら、彩香ちゃんも否定しないし、翼飛もそろそろ諦めて認

めたらどうなんだ？笑w」

別に彩香は水希の戯言を認めているわけではない。彩香はこの手の話が苦手らしくこのような話題になるとほぼ間違いなく顔を赤くし、俯いてしまう。中学校の卒業式の日、いったい何人の男にコクられていたか・・・その全てで顔を真っ赤にし、俯いて黙り込んでしまっていた。相手の男も今日で卒業するためここで返事がもらえないことにはどうにもならない事が分かっており、焦って彩香の腕を取ったりするのだが、その行動で彩香は余計に縮み上がってしまいただオロオロするばかり。その度に俺は彩香の助けに入る事になり、ただただ男の恨みを買うばかりで・・・とんだ卒業式になってしまった。

ちなみ現在彩香の顔を真っ赤にして俯かせている原因になったこのわけの分からない戯言を言ってるこいつは浅見水希（あさみみずき）と言い俺の親友だ。ロクな奴じゃないけど。ちなみに、この水希の冗談はいつもの事なのだが、あながち間違っていないから始末に悪い。水希は知らない事なので、マグレという事になるが、俺と彩香は一応許婚という事になっている。まぁ、俺の親と彩香の親が勝手に決めた事であり、俺は知った事ではないが・・・詳しくは後ほどと言う事にして水希の話に戻す事にする。

とは言え、ロクなヤツじゃないという事を裏付けるだけになってしまうが、この水希というヤツは男の敵であり、ある意味女の敵でもある。見た目が良く、背が高く、運動神経も抜群で、ファッションセンスもいい。簡単にいうとかなりカッコイイのだ。とにかくモテる。なので中学では周りの男からただの引き立て役になるからと嫌煙されていた。まぁ俺も始めは苦手なタイプだと思っていたので余り近づこうと思わなかったのだが、接しているうちに何となくだがイイ奴なのだと分かり今まで交流が続いている。ただ唯一ムカつくのは俺に近づいてくる女の子は間違いなく水希を紹介してくれって

娘だと思って間違いないって事。今ではもう悟りを開いたかのように平気だが、当時はマジで北斗を殺ってしまおうかと考えた程だ。今もそこかしこから女の子の視線が・・・

そんなわけで、俺はよく水希や彩香と一緒にいる事が多いのだが、正直寿命がどんどん縮んでいくようか気がしている。水希の爆弾発言連打で周りから好奇の視線を浴びて身の縮む思いがするし、彩香のファンの男共からは日々殺気だった視線を浴びている。これぞ、心休まる刻がないとでも言うのだろう。

こいつらと一緒にいる事を後悔しているわけではないが、マジ大変なんだ・・・

第2話　夫婦？（後書き）

次回予告

第3話　バスケ部？

俺、試合に出たことすらこれまでの人生で一度もないんだぞ？

第3話　バスケ部？

入学式を終えて数日後、今日は朝からクラブ紹介なるものが体育館であるらしい。同好会やらサークルやらクラブやら、その数が多すぎて午前中全部使うって、この高校大丈夫ですか？色んな意味で・・・

体育館は1年生全員数百人勢ぞろいでもまだ余裕があるほど広い。大きさは違うが他にも体育館がいくつもあり、今いる体育館が第1体育館。ちなみに一番広いらしい。そんな場所に1年生が自由に陣取ってクラブ紹介を眺めていた。

「えぇ～我々は～学園のアイドルである季更様を影にも日向にも日夜守護し、見守り、盛り上げる事を誓うものである！季更様は・・・」

「はぃ、ありがとうございましたぁ～～～」

「なっ！ちょっと！！！まだ季更様の素晴らしい所を述べていないではないか！！！おい！離せぇ～～～～～」

壇上で何やらわけの分からない事を叫んでいたヤツはまだ何やら叫んでいたが、係りの者たちに強制的に退場されていった。いったい何部だったんだ？そもそも『季更様』って誰？

そんなわけの分からないクラブ紹介が続き、やっと最後の方になってサッカー部やら野球部といった“まともな”部が紹介されている。

「我々野球部は、毎日朝と放課後に練習があり、去年の成績は夏予選ベスト8まで進み、今年こそは甲子園出場を目指します！！！初

心者でもいいんでヤル気のある人は野球部へ！！！」
とは、野球部のキャプテン。
「私たちは週一回家庭科室で所属メンバーのアンケートによって、和食から洋食、クッキーからケーキまで何でも作ります！興味のある方はお気軽にお越しください♪待ってるね☆」
とは、料理部の副部長。
「僕たちバスケ部は弱小で去年の成績といっても地区予選2回戦負けくらいしかありません。文化祭には恒例となったライバル城北付属と試合がありますが、部員が3人しかいなく・・・城北には負けられません！力を貸してください！！！」
とは、男子バスケ部キャプテン。ちょっと悲痛な叫びだった。

その他にも、国立を目指すというサッカー部、花園を目指すというラグビー部、バトミントン部や女子バスケ部、バンドボール部などの運動部。将棋部や囲碁部、長期休みを利用して全国の温泉に行くという温泉同好会までちょっと変わったクラブを含む文化部の演説が午前中いっぱい続いた。

「疲れたぁ～長すぎる～俺全然覚えてないし～？」
「いや、水希は始まって直ぐ爆睡してただろ・・・」
「俺くらいになるとあれくらいの話なら寝ながらでも聞けるのさっ！」
「ふぅ～ん、なら一番初めに紹介された部活は？」
「・・・・・」
各クラブの演説の間にはそれぞれのクラブのデモンストレーション等があったりして、料理研究部などは直前に作ったというお菓子を袋詰めにしたものを体育館中に投げ入れたりして一時騒然とした場面もあったというのに、こいつは全く気付いてないっぽい。今ここで水希に『のび太くん』の称号を与えようかとマジで考えてしまう。

「ほら、聞いてない」
「うるさい翼飛！あんなもん聞くくらいなら寝てた方がマシだっての！！！」
「まぁ、それは俺も同感だ・・・一番最初のなんか、結局何の部活か分からないまま退場させられてたし・・・」
「なんだそれ？」
「さぁ・・・？」
「翼飛、聞いてても分かってないと意味ないだろ・・・」
「・・・・・」
「・・・・・」
うん。分からないものを気にしてたってしょうがない！人生は昔よりも未来なのだ！
「ところで、水希はやっぱバスケ部？」
「当ったり前だろ！翼飛もバスケ部入るだろ？」
「ん～分かんない。バスケは好きなんだけど・・・　そういえば、バスケ部ヤバそうだったぞ？」
「何か？」
「いや、今たったの3人しかいないみたい。水希が入ったとしても4人で試合出来そうにないし？」
「なら翼飛が入ったらちょうど5人じゃないか！問題ない！！！」
「いや、俺入るか決めてないし・・・しかも、俺、試合に出たことすらこれまでの人生で一度もないんだぞ？」
「あれはあのバカ監督が悪いんだって！あのクソ野郎～翼飛を身長だけで判断しやがって・・・」
「水希は俺を買いかぶり過ぎなんだって＾＾；」
「いや、お前の実力は俺が保障する！だからバスケ部入るからな！」

「あ～はぃはぃ、前向きに検討させて頂きますよ」
「政治家みたいな事言うな！漢なら今ここでバスケ部に入ると言え

！」

「あはは～・・・はぁ～・・・」

バスケはしたいけど、中学の時のような惨めな思いはあまりしたくない。俺はため息しか出なかった。

第3話　バスケ部？（後書き）

次回予告

第４話　ライバル？水希

くっそ～何であんなヤツに勝てないんだ・・・

第４話　ライバル？水希

わけの分からないクラブ紹介から早数日、入学式を終えてから１週間程たった。ちなみにまだ俺は部活を決めてないし、水希も彩香もそれぞれ男子バスケ部、女子バスケ部と入る部活は決めたみたいだがまだ俺に付き合って入部届けは出していなかったりする。

この学校はさすがに設備が整っているだけあって凄い。まるでレストランかカフェかというような学食や、校舎に囲まれている広場にある噴水、いったいどこから資金が出てるんですか？と。　ま、そんな事俺には関係ないし？この頃になってようやくこれらのスケールのデカさに慣れてきた。人間の順応性といったものは凄いらしいと、実感した。

今日は勉強嫌いな俺にとって待ちに待った初めての体育の授業。って、勉強好きなヤツっているのだろうか・・・あぁ、委員長あたり勉強好きなレア人がいるかもしれない。そして体育は苦手という・・・もちろん俺の偏見だが。

で、体育の授業が始まる前に１つ主張したい！何故これだけ施設が充実してるのに男子更衣室ってモンがないの！？女子更衣室はあるのに何で男子は教室で着替えないといけないの？『生着替えタ～イム！』じゃないんだから・・・もしかしてこれは我々男子へのセクハラですか！？

はぁ～はぁ～はぁ～

ただの心の主張でこんなに精神的に来るとは思わなかった・・・ＭＰ残りあと僅か、体育の授業の前に何ギブアップ寸前になってんだ

俺・・・

「今日は初めての授業なので男女ともに１００メートル走と１５００メートル走のタイムを計る！文句あるヤツは前に出ろ！」
この体育教師（名前は忘れた。　てか自己紹介ってあったっけ？）は初授業でこうのたまった。これはネタか？それとも俺たちに喧嘩ふっかけてきているのだろうか？ネタだとしたらこの冷えきった空気を見れば失敗なのは一目瞭然だろうし、喧嘩をふっかけているのならこんな無駄に熱血で話の通じなそうなマッチョに挑んで行く馬鹿はこのクラスにはいないだろう。いや、学校中探してもいないと思う。すなわち、掴みとしては思いっきり失敗だ。この体育教師はこの空気に全く気付いていないけど・・・それにまぁ、個人的に言っても走るのは嫌いじゃないし文句なんかあるわけない。

「文句もないみたいだから始めるぞ！さっさと並べ！体育委員はタイム測って記録取れ！さっさとしないと終わらんぞ～！」
タイムを測るヤツ１人と記録を取るヤツ・・・なし。ゴールした時に自分のタイムを聞いて自分で記入するらしい。まぁこんな事で不正をするようなヤツはいないだろう。

というわけでまずは２人１組で１００メートル走なのだが・・・ミスった。何も考えずに水希と一緒に走ったのだが、こいつ運動神経抜群なんだった。俺もどちらかというと良い方なのだが相手が悪い。そして案の定完敗。この時ばかりは久しぶりに女の子の歓声を浴びる水希を殺ってしまおうかと思った。

そして１５００メートル走の方はまず男子が次に女子が一斉スタートで体育教師がタイムを測った。俺も水希も中学時代から部活で走っていたしこれくらいの距離なら余裕だ。スタートから５人となったトップグループを走り水希は１位、俺は５位に終わった。とにか

くスパートが遅かった。水希と同じタイミングでスパートしても勝てるわけない。
こんな学習能力がない俺。なんだかなきたくなってきた。

「くっそ～何であんなヤツに勝てないんだ・・・」
「あ、赤井くんお疲れさまです。は、はいっ！」
そこに、俺の呟きを途中で遮るように一枚のタオルが差し出された。

第４話　ライバル？水希（後書き）

次回予告

第５話　羨ましい・・・のか？

そんな羨ましそうな顔してど～したのぉ～？

第5話　羨ましい・・・のか？

タオルの差し出された方を向くとそこには女の子が立っていた。彼女の名前は鎌田羽紗（かまたつばさ）。羽紗と書いて『つばさ』と読む。背は俺よりも少し低く、黒髪のショートカットで前髪は目元が隠れるくらいに長い。少し幼い感じながらも平均以上に可愛い顔立ちを隠している。クラスメートで俺の隣に座っており、入学式の日に話した際名前の読みが同じだという事に気付き、それ以来辿々（たどたど）しくもよく話すようになった。星雲高校に入って一番初めに出来た友達だ。

「あ、鎌田さんありがと！」

「は、はい・・・」

俺のお礼の言葉に羽紗は僅かに頬を赤く染めて弱冠うつむき加減で答えた。この辺俺以外に対応する時の彩香に少し似ているかもしれない。羽紗に差し出されたタオルを受け取った後、俺はふとした疑問を感じ口を開いた。

「そういえばさ、このタオル借りちゃったけど、鎌田さんの分はちゃんとあるの？」

「あ・・・あ・・・」

羽紗は小さく手をばたつかせ、少し焦ったように口をパクつかせる。そんな羽紗を見て話が続かないだろうと思い助け舟を出すことにした。

「もしかして、忘れてた？」

「・・・」

羽紗は返事をするかわりにコクッと首を小さく縦に振った。なんとなく子犬を連想させる羽紗の仕草に笑みが零れそうになる。

「それじゃ俺のタオルが教室にあるから、それ使って？鎌田さんが走り終わるまでには取ってくるから」

「あ、ありがとうございます」

そんな事を話していると黄色い声が聞こえてきた。いや、先程から聞こえていたのだが敢えて無視していたのだがそんなの関係ない。ちなみにこれはかの一発屋の登竜門と噂される流行語にノミネートされた某芸人のネタとはもちろん関係ねぇ。
そして、そんな黄色い声の中心にある姿を認め俺は視線はそのままに、呟きに似た言葉を漏らした。

「うわ～相変わらず凄いな・・・」
「は、はい・・・」
羽紗からしても凄いと感じるらしい。その光景は入学式からまだ一週間ほどしか経ってないが既に見慣れたものになってしまった。女の子に完全に囲まれている水希。人間の適応力って凄いな。うん。

「聖徳太子ってあんな感じだったのかな？」
「え・・・？聖徳太子・・・ですか？」
「あ、いや・・・あんな人数に一斉に話しかけられてよく対応出来るなってな」
「そ、そうですね」
我ながら見当違いな感想。それに律儀に反応する羽紗。徳川家康も真っ青の律儀者だ。そんな会話とも取れないような会話をしているうちにもう一人の女の子が会話に参加してきた。

「つぅちゃん～そんな羨ましそうな顔してど～したのぉ～？」
「彩香！？そ、そんな顔してないって！！！ね？」
「え、私には・・・」
ちょっと動揺してしまったのを隠そうと話を羽紗に振ってみたが案の定の反応。それを勝手に肯定と解釈して話を進めてしまう。
「ほら、鎌田さんだってそんな顔してないって言ってるじゃないか」

「え・・・そうなの？う、うん、分かった！」
だいたいの事なら無条件で信じてしまう。彩香のこんな単純な所は好きだ。
少しだけ将来を心配してしまうけど・・・

第5話　羨ましい・・・のか？（後書き）

次回予告

第６話　婚約解消！？

ぐすっ、じゃあ、婚約解消っていうは・・・？ぐすっ、ぐすっ

第6話　婚約解消！？

鎌田さんに貸すためのタオルを取りに戻りグラウンドに帰るとまだ女の子達が走っている途中だった。さすがに彩香は先頭付近を走っているらしい。鎌田さんは・・・彩香のすぐ前を走っている。あの速さからすると、周回遅れ目前みたいだ。運動は苦手みたいだったから・・・うん、予想通り。
なんて失礼な事を考えていると、ついさっきまで女の子に囲まれていた水希が近寄ってきた。

「よう、どこ行ってたんだよ？抜け出したのがバレたらＫＹな体育教師がまた変な事言い出すぞ～？」
「ん？これ」
と言いながら左手に持ったタオルを掲げてみる。水希はすぐに理解したような表情をしたが一瞬でその表情が「は？」って感じに変わった。

「お前、異常に可愛らしいタオルが首に掛かってるって事分かってるよな？」
「これ鎌田さんの」
と首に掛かったタオルを指し、
「これ俺の」
と再び左手に持つタオルを掲げる。
「二つもいらんだろ！」
とツッコミを入れる水希。だが甘ぁ～い！！！手の角度とスナップがもっと！！！って、違う！
それに、
「タオルだらけのお前に言われたくないぞ・・・」
「いやぁ～いらないって言ってるのにみんな渡してくるから困った

困った～」
「困ってるわりには鼻の下伸びてんぞ・・・この女の敵め！何人か寄越しやがれ！！！」
「別に構わんが・・・彩香ちゃんくれよ？」
「あぁ、彩香ならのしつけていくらでもくれてやる！」
「との事ですけど、よろしいので？」
・・・は？水希は微妙に俺から視線を外してなんだか後ろの方を見ている気がする・・・嫌～な予感を感じながら振り向いてみたら、
「うぐっ、うぐっ、うぐっ・・・」
何故ここに！？しかも泣いていらっしゃる・・・
「あ・・・彩香さん？えっと・・・」
「うぐっ、つぅちゃんは、うぐっ、彩なんかいらないだね・・・うぐっ、うぐっ、彩なんかより鎌田さんの方がいいんだ？・・・うぐっ」
「彩香？なんでそこで鎌田さんが出てくるのか分からんのだけど・・・えっと、あれはだな・・・そう！言葉のアヤってやつでな。言ってみれば嘘だ！だよな、水希？」
「そうだったのか？俺はてっきり婚約解消して俺にくれるもんだと思ってたけど？」
「つぅちゃん・・・婚約、解消するの？うぐっ、うぐっ、うぅ・・・」
「あ、いや、それは・・・み、水希が言ってることは全部嘘だ！だから、な？泣くのは止めてくれよ？」
「彩香ちゃんをくれるって言ったのは翼飛なんだけど・・・」
「水希は黙ってろ！お前は俺に恨みでもってあるのか？泣きたいのは俺の方だっての！！！」
「俺嘘なんか一言も言ってないけど・・・彩香ちゃんが欲しいってのはホントだし、その彩香ちゃんをくれるって言ったのはお前だろ？それに翼飛に恨みなら、彩香ちゃんに加えて最近じゃ羽紗ちゃんにまで手を出して・・・それこそ掃いて捨てるくらいあるぞ？」

「水希～もう俺の負けでいいから勘弁してくれ～！！！　それに婚約解消とかわけの分からない事言ってたじゃないか・・・」
「ん？ホントに婚約してるのか？」
「い、いや・・・　頼むから俺をいぢめるのそろそろ終わりにしてくれよ・・・　彩香も本気で泣かない！あれは全部冗談なんだから！」
「ぐすっ、じゃあ、婚約解消っていうは・・・？ぐすっ、ぐすっ」
「それは水希が勝手に言ってるだけ！　ていうか、俺は婚約したつもりはないんだが・・・」
俺の最後の言葉はもちろん彩香の耳には届いていなかった。

なぁ彩香、泣くのはやっぱりズルイと思うぞ？
そして、それを口に出して言えない俺はヘタレなんでしょうか・・・

第6話　婚約解消！？（後書き）

次回予告

第7話　ギャラリー

この学校、こんな事許してて大丈夫なのか？

第7話　ギャラリー

どうにかこうにか彩香をなだめすかし、やっとの事で落ち着きを取り戻したので俺は今まで不思議に思ってたことを聞いてみた。
「なぁ、あのギャラリーって何なんだ？今って他のクラスも授業中だろ？」
そう、俺たちが授業を受けているグラウンドを囲むように数人のグループで合わせて１００人くらいか、とにかく多くの生徒が見学していた。今も熱心にグラウンドを見つめていたり隣同士で話していたり何かをメモしていたりと様々な様子が伺える。見学しているのは星雲高校の制服を来ているのでうちの生徒だと思うし、見れば２年や３年の先輩ばかりだった。この星雲高校は学年別に男子はネクタイ、女子はリボンの色が違い、俺たち１年は藍、２年は深紅、３年は深緑で異なり一目見ただけで分かるようになっている。今グラウンドを使っているのは自分たちのクラスだけ、そして今は授業中。明らかにこの先輩方は自分たちの授業をサボっている。なのに無駄に熱血な体育教師もそれを見て何も言わないし、いったい何なんだろうか？

「なんだ知らなかったのか？ありゃいうなればスカウトだな」
「スカウト？」
水希の口から一般高校生には無関係だろう単語が発せられた。未だにピンと来ない俺に向かって水希は説明を続けた。
「一年生の有望選手を物色してるらしいぜ。ほら、あそこがサッカー部であそこがバレー部。あれが陸上部だな。バスケ部は・・・分からん！」
なぜバスケ部は分からないんだろう？そして別にそれぞれの部がユニフォームを着ているわけでもない。なぜ水希はどの上級生がどの部の部員なのか分かるのだろうか。

「この学校、こんな事許してて大丈夫なのか？」
「学校始まって以来の伝統っぽいぜ？ていっても凄げえ浅い伝統だけどな」
「それじゃあ、この授業はトライアウトって感じなのか？てことは・・・水希と彩香は各部のスカウト陣が殺到するかもな～」
「俺はもうバスケ部って決めてるから」
「あ、彩も決めてるのに・・・どうしよう」
と既にスカウト陣が殺到した時の事を考えたのか見るからに不安そうな顔をする彩香。
「はいはい、何だったらついていってやるから、実際に誘いが来てるわけでもないのにそんな不安そうな顔すんなって」
「相変わらず翼飛は彩香ちゃんに甘いな～」
「何か言ったか？水希？」
「な、なんでもないぞ？うん。そんなに親友を睨むなって・・・怖いぞ？」
翼飛のジトーっとした視線に微妙に後ずさりながら呟く水希。
「ま、まぁ翼飛だっていいタイム出してたんだし、どこかの部のスカウトが来るかもしれないぞ？今からでも断りの文句考えとかないとな！なんだったら彩香ちゃんに着いてきて貰ったらどうだ？」
「んなこと1人で大丈夫だ！」
「えぇ～つぅちゃんは彩の助けはいらないのぉ～？」
「い、いや、彩香には着いてきてもらおうかな。うん」
再びぐずりそうになった彩香を慌ててなだめすかす翼飛、その隣では水希が肩を震わせながら笑いを堪えていた。

第7話　ギャラリー（後書き）

次回予告

第８話　幼馴染

まるで運命、みたいです

第8話　幼馴染

結局俺にはどこの部からも誘いの話は来なかった。これでも運動神経にはそれなりに自信があったからショックと言えばショックだったが、残念ながらこんな事には慣れていると言えば慣れてしまっていた。彩香はと言えば運良くと言うか、一番始めに話に来たのが女子バスケ部であり、そのまま入部届けにサインしていた。さしずめドラフトでは自由獲得枠って感じだろう。まぁその後にも話をしにくる部活があったりして何故か俺が大変な思いをしたんだが・・・一瞬彩香の胸に“売約済”とでも名札を張ってやろうかとマジで考えてしまった程だ。いや、別に怪しい意味はこれっぽちもないぞ？

一方の水希には誘いの手が殺到した。水希は男子バスケ部への入部を決めているのだが、水希の性格を見抜いたのか誘いの話をしてくるのが女子マネで・・・それがことごとく標準以上に綺麗ｏｒ可愛い子ばかりで・・・水希も面白く思ったのか、のらりくらりと返事を避けたものだからここ数日の間は休み時間に話しかける事すら難しくなっていた。別に隣に座っている羽紗や彩香と話していたから水希に話しかけられないからと言って淋しいってわけでもなかったが・・・どっちかっていうとそっちの方が楽しかったり？ただ、はっきり言ってうるさかったし、そしてキザったらしい水希はウザかった。

「はぁ～あの性格どうにかなんないかな」

俺の視線の先には相変わらず女の子に囲まれている水希がいた。女の子たちの方も水希をスカウトに来たのか、ただ話したくて来たのか分からない状態に見える。正直、男として少し羨ましいかもしれない。そして、そんな俺の呟きが聞こえたのかちょうど自分の席に戻ってきたらしい羽紗が珍しく話しかけてきた。ちなみに、俺は彩

香の席に非難中で、当の彩香は席を立ってたりする。
「赤井くんは、浅見くんとは古いんですか？」
「まぁね。とは言っても中学からだけど」
「そうなんですか？では大空さんも？」
「いや、彩香は物心つく前から。生まれた時からほとんど一緒に育てられたから」
一応言っておくが俺にそんな記憶なんかない。全ては親からの受け売りだからホントかどうかなんて分からないが、物心ついた時にはいつも隣には彩香がいたからほぼ親の言うとおりなんだろうと思う。
「それはまた、凄いですね」
「そう？」
「はい。まるで運命、みたいです」
運命。彩香との仲をそんな難しく考えた事なんてなかった。いつも隣にいる何かと俺を頼ってくる女の子。それが俺にとっての彩香だ。俺は羽紗の女の子らしいロマンチックな考え方に苦笑しながら答えた。
「俺にしてみれば、くされ縁って感じだけどね～」
「でも、羨ましいです・・・」
急に声のトーンを落として呟くように放たれた羽紗の声は俺にははっきりとは分からなかった。
「え、なに？」
「いえ、何でもないです・・・」
そして俺のささやかな疑問の答えは返ってこなかった。その代わりに・・・

「なになに？つぅちゃん何の話してるの？」
「うわ！？彩香か。いきなりビックリさせんなよ」
「彩も仲間に入れてよ～！ね？ね？」

「はいはい、分かったから抱きつくなっての」
周りの視線が痛いです。視線と言うよりまるで死線。寿命が確実に減ってる気がする・・・
で、羽紗さん？何故に笑ってるんですか？可愛いけど・・・彩香が怖くて口に出して言えない俺はヘタレです。ごめんなさい。

「えっと、、お二人ともとっても仲がいいんだなって・・・」
俺の疑問が顔に出てたか！？もしかして声に出てた！？もしかして、羽紗は超能力者なのか！？
「い、言いたそうだったから・・・ち、違ってたらごめんなさい！」
なんていうか、超能力者説を裏付けてない？とりあえず羽紗の前で変な事考えるのは止めよう。うん。あんな事やこんな事や・・・って、羽紗の顔赤くなっちゃったよ。やっぱり可愛いな、うん。

・・・あれ？今頃だけど彩香さん、なんかキャラ変わってない？家にいる時のテンションと同じじゃね？まぁ友達と親しく話すのはいい事だけど・・・よく考えたら確かに話に割って入ったけど、彩香が話しかけたのって羽紗じゃなくて俺な気が・・・

すでに処理出来る容量を超えている翼飛の脳内はぐちゃぐちゃになっていった。
そして、いつもは使わない翼飛の頭から煙が出始めたのは数秒後の事である。
って、ロボットじゃないぞ！？

第8話　幼馴染（後書き）

ネット小説ランキングってのに登録しています。（今頃連絡^^；；；）

この前ちょっと見てみたら、なんと！！！

数票入っているではありませんか！

いや、ホントありがとうございますｏ（｜　｜＊）ｏ

ちょっと色々あってテンションダウンでなかなか進まなかったけど、

やる気出たかも！ｗ

次回予告

第９話　彩香の気持ち

私は絶対につぅちゃんからは離れたくない。なにがあっても・・・

第9話　彩香の気持ち

物心がついた頃から隣にはつぅちゃんがいた。いや、私がつぅちゃんの隣にいる。
意味は同じように見える絶対に違う。つぅちゃんの心の中はつぅちゃん以外誰も見る事が出来ないから。そう、それはずっと一緒にいる私にも。

つぅちゃん、本名は赤井翼飛くん。実は親同士が勝手に決めたとはいえ許嫁だったりする。それを聞いた時はとってもビックリしたけど、私はそんな事関係なく彼の事が・・・でもつぅちゃんは勝手に決められた事が気に食わないらしい。そんな事なんてことないのに。
ううん、引っ込み思案な私にはむしろ好都合で内心嬉しかった。
つぅちゃん家はお隣さんで同い年で私の方が3日だけお姉さん。なのに人見知りで泣き虫な私はいつもつぅちゃんの後にくっついていた。それは今になっても全く変わっていない。つぅちゃんは身長差を気にしていて、そして3日間だけ年下になるのを気にしていて、口では一緒にいる事を嫌がっているけど・・・私は絶対につぅちゃんからは離れたくない。なにがあっても・・・

最近つぅちゃんの横にはよく可愛い女の子がいる。つぅちゃんの隣の席だから必然的に隣にいる事になるんだけど。その女の子の名前は鎌田羽紗さん。つぅちゃんと同じで『つばさ』って読む。当て字・・・なのかな？つぅちゃんと同じ読み方をする名前。ちょっと羨ましいな。

ちょっと前まではつぅちゃんの横は私だけの指定席だったのに。少しずつ鎌田さんに奪われてる気がする。私の気のせいならいいんだ

けど。鎌田さんはつぅちゃんよりも少し小さくって、可愛くって・・・このままじゃ私だけの指定席が！！！
そんな事考えてたらまた泣きそうになっちゃった・・・ダメダメ、もっとしっかりしなきゃ！私の方がお姉さんなんだから。

今もつぅちゃんと鎌田さんは楽しそうにお話してる。私は（つぅちゃんよりも）大っきいし、（鎌田さんよりも）可愛くないし、つぅちゃんにとっては迷惑かもしれないけど、ここで引き下がれない。つぅちゃんに関しては私が一番知っている。涼風さんにだって負けないって自信があるし、こんな所で負けられないって気がした。

え～っと、え～っと、どうしよう。
「なになに？つぅちゃん何の話してるの？」
「うわ！？彩香か。いきなりビックリさせんなよ」
「彩も仲間に入れてよ～！ね？ね？」
「はいはい、分かったから抱きつくなっての」
気付いたらつぅちゃんに後ろから抱きつき二人の話に割り込んでいた。
あわわわわ・・・無意識に私何してるんだろっ！？は、恥ずかしいよぉ～！！！

この後、鎌田さんが何か話してたような気がするけど、私の耳には全く届かなかった。

第9話　彩香の気持ち（後書き）

サブタイトルを決めるのが意外と大変です。。llorz
かなりいい加減だし・・・^^;;;;

次回予告

第１０話　休日
う～ん・・・よしっ！起きたっ！！！

第１０話　休日

ピピピピッ、ピピピピッ、ピピピピッ、ピピピピッ・・・

「ん・・・」

ベッドで眠っていた少年の手がゴソゴソと布団の中から伸び、いまだ鳴り続ける目覚まし時計を少々乱暴に止めた。

「う～ん・・・よしっ！起きたっ！！！」

と一気に起き上がり大きく伸びをしてカーテンを思い切りよくあける。うん、今日もいい天気だ。今日は土曜日、そして今は朝の８時。星雲高校は完全週休二日制で土曜日は休み。ただその分進学クラスはほぼ毎日７限まで授業が詰まってる。ゆとり教育とは名ばかりで、そのしわ寄せは全て学生に来てるんだからたまったもんじゃない。というわけで休みなんだから昼過ぎまで寝ててもいいのだか、早起きは俺の毎日の日課だったりする。寧ろ平日は５時や６時には起きてるのでかなり遅いかもしれない。俺が毎日早く起きる理由、それは・・・って、こんなゆっくりしてたら休みの日に早く起きた意味ないじゃん！さっさと着替えよっと！！！

時間がないと食べないこともあるのだが、赤井家の朝食は基本的に洋食だ。トーストにコーヒーか紅茶、あと適当にサラダやらスクランブルエッグやら色々。レパートリー云々ではなくて時間の問題。

「「いただきまぁ～っす！」」

・　・　・

「「ごちそうさまでしたぁ～！」」

なんで声が2つ聞こえるのか、それは俺と一緒に朝食を食ってる人がいるから。こいつ最近毎日うちで朝食とってない？これは気のせいなんて事はない。入学式からずっと一緒に朝食を食べてる・・・なんで？ちなみに俺の両親は既に食べ終わってリビングでくつろいでいる。少しくらい待っててくれてもよくない？一人息子がこれくらいに起きてくる事知ってんだから・・・そう、俺には兄弟なんていない。

で、今まで俺の正面で朝食を食べていた張本人は今は食器を片付けて洗い物中。って、お前がやんなくていいからっ！

「おぃおぃ、そんな事やんなくていいから！母さん！！！」
「・・・・・」
無視ですか？
「涼風さん～？」
「なぁ～に？翼飛」
「お客さんに何させてんだよ・・・」
「お客さん？」
「彩香だよ、彩香！」
「彩香ちゃんがどうしたの？」
「彩香に洗い物させてなにやってんの！」
「大和さんとまったり♪きゃ☆」
きゃ☆じゃないっての！歳を考えろ！！！ちなみに大和さんっての
は赤井大和。俺の父親だ。背は１８０くらいあって高い・・・ホン
トに父親か？って、こんな所で衝撃の新事実なんかいらねぇ！事実
だったら泣くに泣けないし・・・
「翼飛・・・」

「な、なんでもありません・・・」
俺ってそんなに考えてる事がバレやすいのだろうか？母さんの声が一段と低くなった。これは明からに涼風さん怒っていらっしゃる。
「それにね、彩香ちゃんはうちの子みたいなものだからいいのよ♪翼飛も幸せね～嫁姑問題なんか全くないわよ♪」
はぁ～ダメだこりゃ・・・別にそんな心配してないし。そもそも何で彩香と結婚するって決め付けてるんだよ。
「彩香～俺やるからお前は座ってろって」
「で、でも・・・」
「いいからいいから。それよりこれ終わったら行くけど、お前どうする？」
「行く！！！」
「んじゃさっさと帰って準備してこいって」
「うん！！！それじゃつぅちゃんココお願い！涼風さん大和さんお邪魔しました！」
「あら、彩香ちゃんもう帰っちゃうの？これから式場の打ち合わせしようと思ってたのに♪」
・・・意味分かんない。彩香も顔を赤くするんじゃありません！
「おぃ彩香、ボーっとせずにちゃんと歩けよ！それじゃまたコケるぞ？」
「彩はそこまでドシじゃありません！きゃあ～！」
どっかで足を引っ掛けたらしい。頼むからマジでコケないでください。
というわけで俺は洗い物をさっさと終わらせて出かける準備を始めた。

第１０話　休日（後書き）

次回予告

第１１話　彩香とお出かけ

これはデートではない！繰り返す。デートではない！！！

第１１話　彩香とお出かけ（前書き）

前話からいつの間にかこんなに時が過ぎ・・・
本当に申し訳ないです。
出来れば、これからもよろしくお願いします。
それでは、とっても久しぶりの最新話です。

第１１話　彩香とお出かけ

出かける準備を終えて家を出るとちょうど彩香も隣の家から出てきた所だった。さすが俺、タイミングピッタリ！！！

「おぅ、ちょうどいいな！じゃあ行くか！って・・・荷物は？」

いったいお前は何の為に出かけるんだか・・・声に出したら絶対に泣き出すから言わないけど、俺は心の中でため息をつく。

「あっ！ちょっと待ってて！！！」

ーーーガシャン！

「きゃ！」

ちょうど自転車に乗ろうとしている所だった彩香は慌てて忘れ物を取りに行こうとし、自転車に足を引っ掛けたらしい・・・んな慌てなくてもいいから。家を出た直後に怪我をするのは勘弁してくれよ？なんか・・・デジャブ？

「おぃ、待っててやるから！落ち着け！」

「絶対待っててよ！絶対だからね！」

「はいはい・・・」

彩香は慌てるように家に駆け込んでいった。頼むから階段から落ちたりするなよ？そう思いながらいまだに倒れたままだった彩香の自転車を持ち上げた。って前輪が曲がってるんだけど・・・そんなに衝撃あったか！？

がった～ん！！！

「きゃ～～～！」

「・・・・・」

俺たちが到着した所は家から自転車で１５分くらいの公園。ここま

では俺の自転車で二ケツ（二人乗り）してきた。ちなみに彩香はかすり傷ひとつ負っていなかった。いったいあの大きな音と悲鳴はなんだったんだろうか。女の子は不思議だ。

ていうか先に言っておくぞ。これはデートではない！繰り返す。デートではない！！！彩香の格好は上下ともにピンクのジャージで・・・（その色どうにかなんない？）俺は下は紺色のジャージに上は白に色々と書いてあるようなTシャツ。（人の事言えない気がするのは気のせいだろうか・・・）こんな格好でデートだとか言うやつがいたらお目にかかりたい。デートっていったら、そう、あれだ。なんだ？うん。もっとお洒落して？ええい、悪かったな！俺はデートなんかした事ありませんよ～だ！クラスで可愛い子がいてもことごとく水希水希って・・・

って違う！完全に脱線してしまった。そう、俺たちが到着した先は公園にあるバスケットコート。俺たちはバスケをしにきたのだ。だから二人とも動きやすい格好をしてたってわけ！あんだ～すたん？

白島中央公園。俺たちは白鳥公園と言っている。その由来は白鳥が飛んでくるからとも、白島を白鳥と読み間違えたからとも言われているが誰もその真相は知らない。気が付いたら白鳥公園と呼んでいた。現代には珍しく、緑あふれるかなり大きな公園で、その中にフェンスに囲まれたバスケットコートが1面ある。フェンスに囲まれているとはいえ、鍵がかかっているわけでもなく、自由に使えるようになっていた。俺は土日晴れだったらほぼここでバスケットボールをついている。彩香もほぼ毎回俺に付いてきている。彩香の実力も普段の彩香の姿とは見間違うほどに高いし、1人よりも2人の方が練習にも幅が広がるし、俺にとっては嬉しい限りだ。

第１１話　彩香とお出かけ（後書き）

次回予告

第１２話　白鳥公園の魔法使い

当時の俺は目を輝かせてその奇跡を眺めていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7945d/

Angel's wing

2010年10月18日10時43分発行